

プロローグ

暗い部屋に机がひとつ浮かび上がっていた。

机自体が明かりとなっていたのだ。それ以外に室内の照明はなく、周囲は真っ黒い暗闇に満たされている。

青白い光は机の両側に並び座る数人の人影をぼんやりと照らし出していた。

一方に五名、もう一方に五名。

それぞれに揃いの制服を身に着けた彼らは、互いの存在こそ明らかであるものの、互いの容貌ははっきりと認識できていない。

素性は明かさず、けれど必要な話の片はつける。手元のみ物足りない照明は、この場のような密会には都合がよかった。

「……では、こちらの提案に異論はないということですか？」

一方から厳かに低められた声が対岸へかけられる。話す男とその正面の男の間には一束の書類が置かれていた。

語りかけられた男は頷いたように身じろぎ答える。

「はい。我々第七機関は以上の取り決めの通り、イカルガ連邦の独立に全力を挙げて協力いたします」
「それを聞いて安心しました。では……サインを」

黒い手袋に覆われた手が、間にあつた書類を相手のほうへと滑らせた。

対岸の男は白い手袋の手で受け取り、その下部にペンを走らせる。終わると書類の向きが変えられ、今度は白手袋の手が紙束を差し出す。

黒手袋が受け取り、先ほどの署名の隣にペンで名を連ねる。

同じようにもう一束、同じ文面の書類に署名が行われ、互いの手に一通ずつ渡った。

「さて、本題に入りましょう。詳しい話は……」

第七機関と自分たちを呼称した男が肩越しに後方へと視線をやる。と、暗闇の奥から新たな人物が姿を現した。

歩み寄るごとに、その容姿が机の明かりで浮かび上がる。

細身の男のようだった。向かい合って座る男たちのどちらの制服とも違う、黒いスーツを身に着けている。ただでさえ暗い室内にもかかわらず目深に黒い帽子をかぶり、その下からは緑色の髪と、深く口角を持ち上げ笑む口元が窺える。

黒いスーツの男は硬い革靴の足音を響かせながら、机の端までやってきた。座する男たちを一堂に眺

めるように、首を巡らせる。

「お初にお目にかかります。ここから先は、私が説明させていただきます」

まるで舞台役者でも気取るかのように深々と一礼してみせると、男は改めて笑みを作った。

語る口調は丁寧で穏やかだ。だが悠然と他者を見下したような響きがあった。

それはともすれば言いがかりとも誹られる根拠のない感覚的なものでしかなかった。だが誰も口に出しはしなかったものの、誰もが不快に感じていた。

それでも座する男たちは黒服の言葉を待つ。説明役の態度くらいで大切な議論を横道に逸らす暇など、彼らにはないのだ。

それがわかっていて、黒服の男はあえてゆったりと話し始めた。

「イカルガ連邦内の階層都市イブキドにあります、第七機関所有の研究施設において、近いうちにとある実験が行われます。それは……簡単に言えば画期的な兵器の起動実験なのですが。これが成功すれば、世界虚空情報統制機構に十分対抗できるでしょう」

緩やかに語る男の淀みない口調に、机に並ぶ黒手袋の男たちが低くどよめいた。

そのうちのひとりがわずかに机へ身を乗り出し、黒いスーツの男を見上げるように問う。

「では、その兵器があれば……統制機構に勝てるのか？」

「ええ、もちろん」

スーツの男の笑みが深まる。手の内を晒すように広げて、男は悠然と続ける。

「そのための協力も第七機関は惜しみません。我々は共通の目的と敵を持っているのです。そして戦うだけの力がある。戦って……勝利するだけの力が」

それはまるで誘惑の文句だった。

約束された勝利がそこにあると錯覚させるような香りが男の言葉からは漂っている。そしてその香りがいかな毒をはらんでいるかに気付く者は、この場にはひとりもいなかった。

むしろ魅惑の言葉は一足早い勝利の美酒であるかのように、すでにこの場の者たちを酔わせていた。

「ならば……」

「ええ。これを逃す手は……」

「ついにこのときが……」

いくつもの声がざわめく。その声が部屋の暗闇を震わせる。

スーツの男が愉快そうに喉を鳴らした音など、当然のように掻き消えた。

帽子をかぶった男は語る。

「もう十分に我々は待ったのです。さあ……戦争を始めましょう。戦争を、大いなる自由と平和を勝ち取るために、戦争を始めましょう。多くの犠牲が出るでしょう、多くの苦しみが生じるでしょう。ですがそれも致し方ないこと」

さあ、戦争を始めましょう。

「巨悪を倒し、自由と平和を手にするためには必要な礎いしづえなのです！」

さあ、戦争を始めましょう。

「大いなる、大いなる自由と平和のために！」

言葉は波紋のように、静かな高揚をほの明かりと闇の中へ浸透させていく。

誰もが確信していた。今日、この時こそが始まりなのだ。

そしてそれは事実『始まり』であった。

とても長い歴史を紡ぐ始まり。

光の届かぬ闇の中で、男はひっそりと笑んでいた。

第一章 キサラギ家の人間 / Distorted recognition

1

荒地と呼ぶべきか、廃墟はいきよと呼ぶべきか。

そこはただ、ただ、崩壊した場だった。

深い裂傷の走る乾いた土地に、乱雑に瓦礫がれきが散らばっている。その範囲と瓦礫の明らかな頑強さから、ここにそれなりの規模の建造物があったことは明白だ。

だが今はない。少なくとも、ヒビ割れ不自然に盛り上がりあちこちで焼け焦げた地上には。

ここにあったものはすべて、四年前の事故によって爆発して吹き飛んだ。そして……彼の足元にあるように、無残な瓦礫群と化した。

「……ひどいものだな」

一際大きな瓦礫の上から辺りを眺めて、彼——ジン＝キサラギは苦く咳せきいた。

絹糸のような金髪に鮮やかな緑の瞳を持つ、整った顔立ちの青年だった。吊り上がった目は冷静さと

知的さを感じさせるが、今はそこに深い憂い^にが滲む。

この場所のことは度々話には聞いていた。主に、去年まで通っていた士官学校の授業でだ。ここはイブキド。

四年前、ここにあった研究施設が原因不明の爆発事故を起こして壊滅した。周囲を広く巻き込んだ事故は凄惨なもので、生き残ったのは少女がひとりのみと記録されている。

そしてその事故をきっかけにして内戦は激化した。

イカルガ内戦。四年前も今も続いている内戦のことだ。

苦渋のため息を静かにつくと、ジンは瓦礫の頂から地上へと飛び降りた。ブーツの下で砂埃^{すまほこり}が舞い、羽織った青い上着が大きくはためく。

身に着けているのは彼が所属する『世界虚空情報統制機構』^{せいかいこくうじょうほうせいぎきこう}の衛士^{えいし}の制服だった。世界虚空情報統制機構^{せいかいこくうじょうほうせいぎきこう}、通称『統制機構』^{とうせいきこう}の第四師団にジンは所属している。

本来なら彼はこの地に——イブキドを含むイカルガの領地に、戦争をするために来た。

無論、イカルガ内戦だ。統制機構管轄下^{とうせいきこうかんかつか}にありながら特別に自治権を認められた温情措置^{じやうじやうしやうじ}にもかかわらず、突如反旗を翻し内乱を勃発させた反逆者『イカルガ連邦』を鎮圧しなければならぬ。

だがその前に、戦地を離れてジンは単身この場所へとやってきたのは……。

(呼ばれたような……気がしたが)

誰かに。なにかに。明確に声として聞こえたわけでも、物理的にメッセージを受け取ったわけでもなかったが、そんな気がしてならなかった。

ここへ来なければならなかった。

ここはなにか自分にとって、とても重大な意味を持つ場所のはずだ。

そんな風に思うのには理由があるはずだと思っていたし、訪ればわかるだろうと思っていたのだが、今回は見当違いだったようだ。

「……少なくとも、僕を呼んだのは彼らではなさそうだな」

渴いた砂塵さじん交じりの風にジンの眩くらきが混じって流される。

風の行き先をたどるように視線を滑らせたジンは、不意にその鮮やかな緑色の瞳を鋭くさせた。辺りはひたすらに静かだ。だがその中に無数の気配が潜んでいることに、ジンはとうに気付いていた。

地面に突き立った瓦礫の陰に、大地が割れて生まれた浅い崖状の地形に、深く走った亀裂の隙間に。武器を持った兵士が身を潜めている。

数はおよそ三十。誰も彼も緊張し、ジンのいる方向に注意を払っているが、どういうわけかジンがあらゆるさまに背を向けても襲撃してくる様子はない。

イカルガ連邦の兵士だろうか。だがここは戦地からも遠い。ジンがここへ立ち寄ったのもまったくの偶然だ。

そんな突然の決定すら外部に漏れているということだろうか。だとすると重大な情報漏えいが起こっている可能性もある。

そんなことを考え、ジンが警戒に神経を尖らせていたときだった。

重々しい物音と共に瓦礫の山が崩れた。

弾かれたようにジンは振り向き、携えていた青い鞘の刀に手を伸ばす。身を低め、いつでも抜けるよう構える。

睨み据えた視線の先で瓦礫がまたひとつ落ち、その下から赤く、太い腕が生えてくる。

続いて頭が、そして分厚く幅広い屈強な体が現れる。

瓦礫の下から出てきたものは人形をしていた。性別で区分するなら男だろう。だが人間にしてはその図体は少々大きすぎる。

見上げるほどの長身で、およそジンの腕では抱え込めないだろうがっしりとした体軀はまるで岩石のようだ。

窮屈そうな衣服からのびる、丸太のような腕もそこだけは人間らしい頭も、肌の色は赤い。

赤い肌の巨漢。その外見は統制機構の中では広く知られている。統制機構に対し長年抵抗意思を表明し活動し続けている第七機関という組織に在籍する、サイボーグ兵士だ。通称――。

「第七機関の赤鬼……か？」

身構えたままでジンは目の前に現れた赤肌の男を見据えた。

男は肯定も否定もしなかった。ただじっとジンを見据えると、顔のサイズの割には小さなサングラスを太すぎる指で押し上げた。

「姿を隠すこともなく堂々と待ち伏せとは。よほど腕に自信があるのか、それとも戦を知らぬ馬鹿なのか？」

「質問に答える」

落胆したような侮辱は不愉快だったが、構わずにジンは鋭く相手を睨む。

その冷やかな眼差しをしばし見つめ返すと、巨漢はため息をひとつついてわずかな動作で頷いた。

「……その通りだ。どうやら自分が誰を相手にしているかは、理解しているようだ。貴様は新兵か？ 逃げるのならば見逃してやる。命を粗末にするものでは……」

気遣うように言いかけて、赤鬼は唐突に言葉を切った。

彼にかけているサングラスは不透明で、その下でどんな目を向けているのか見通せはしない。だがその視線は明らかに、ジンの持つている刀に注がれていた。

「それは……まさか」

赤鬼の太い声が不穏に響く。それだけでジンには、このサイボーグがなにを察したのか理解できた。

彼は知っているのだ。ジンの持つこの刀がなんなのか。

飾りのない水青色の鞘に納められたこれは。

「『事象兵器』……」

低く呟かれた赤鬼の言葉に、ジンはふんと素っ気なく鼻を鳴らした。
事象兵器。

約百年前、全人類を滅亡の危機に追い詰めた災厄があった。その名は『黒き獣』。

その災厄と戦い、災厄を斬り祓うために開発され、そして見事災厄を打ち倒したいわば伝説の武器が
事象兵器だ。

ジンの刀はそのうちの一振り。事象兵器『水剣・ユキアネサ』だ。

赤鬼の独白は問いではなかった。ゆえにジンは答えもしない。

返答の代わりに、周囲の空気がしんと冷える。水を操り、冷気を操るユキアネサの気配が場を静かに
支配する。

「名を聞こう。新兵」

控えめな動作だったが、赤鬼が戦闘体勢に身構えた。

ジンは口の端をわずかに引き上げた。

「ジン＝キサラギ」

その一言が口火となった。

動いたのはほぼ同時。ただしジンのほうが明らかに身軽だった。強く土を蹴り、前方へ深く踏み込むのと同時に、構えていた刀を素早く振るう。

鞘に収めたままの刀が鋭く空を裂く。青白い鞘はそこに刃があるかのような勢いで赤鬼の額を割った……はずだったのだが、その寸前で火花が散った。

「なに!？」

速度では追いつけなくとも、ジンの行動は読んでいたのだろう。持ち上げた剛腕とそこに取り付けられた金属パーツでもって、赤鬼は危うくもジンの一撃を受け止めていた。

くつ、と悔やむ声を漏らしてジンは跳び退る。が、その体が不意に強く引かれた。

引いたのは赤鬼だ。彼の腕の装置から発生した放電が、まるで強力な磁石に引き寄せられる鉄の塊のようにジンを捕える。

そのまま赤鬼が腕を振り上げると、放電に搦めとられたジンはたやすく宙へと持ち上げられた。高い位置から一息に、乾いた地面へ叩きつけられる。

「ぐうっ……」

欠片の容赦もなく背中に衝撃を受けて、ジンは低く呻く。

すぐさま追撃の拳が岩石のように降ってくる。だがそこまで大人しく受けてやるつもりはなかった。ジンは素早く後方へ転がり、身を起こす。

なびいた金髪を掠めて、赤鬼の拳が地面を割り砕く。

凄まじい力だった。まともに食らえば砕けたのはジンの全身の骨だったかもしれない。

続けて振り回された大木のような赤い腕を、ジンはあえて駆け込み身を低めて躲す。赤鬼の懐へ潜り込むと今度は低い位置から斬り上げるようにして鞘を打ち込む。

鈍い手応え。鞘の先が赤鬼の顎を叩く。のけぞる赤鬼を銀色の柄が追う。こめかみに叩きつけた柄の一打に、赤鬼の首が大きく揺らいだ。

だが赤鬼の足を一步でも引かせることではできなかった。

揺らいだ体を引き戻す勢いのまま、赤鬼が屈強な全身でタックルを仕掛けてくる。

ジンは跳ぶ。赤鬼の肩を踏み台にして反対側へと逃れた。その背に圧迫感が迫る。

反射的にジンは刀を振るった。

振り返り様のその一撃は、幸運にも赤鬼の拳と正面からぶつかり合う。

衝撃は痺れとなってジンの腕にまで伝わった。

多少は相手にもダメージとなったのだろうか。赤鬼が厳めしく表情を歪めたのがわかった。

踏み込み、ジンは打ち込む。続けて攻撃を重ねる。赤鬼の力は計り知れない。ならば奴が攻撃する間を与えなければいい。

だが赤鬼は防戦一方となりながらも、決定的な一撃を許さない。ジンの刀と赤鬼の金属パーツがぶつ

かり合うたびに、甲高い金属音がけたたましく響く。

彼らの周囲を取り囲んでいたはずの兵士たちは、誰ひとりとして動こうとはしなかった。動けなかったのだ。下手に手を出せば死ぬ。彼らの目の前で繰り広げられている交戦は、そういうレベルのものであった。

繰り返される斬撃の中で、赤鬼が不意に動く。だがそれは反撃ではなかった。絶え間なく降り注ぐ攻撃を受け止めながら、もう一方の手を耳元に当ててぶつぶつと呟いている。

「……準備は？ ……なら頼む……ぐに、だ」

ジンの耳にはそんなような言葉が聞こえた。

低い耳障りな独り言を遮るように一際強く打ち込むと、弾かれた反動を利用してジンはひとつ後方へ跳ぶ。引いて構えたユキアネサの柄に、手袋で覆われた手をかける。

「ずいぶんと余裕だな。誰と話している？」

「貴様には関係のないことだ」

刃のように冷えたジンの問いに、赤鬼は表情をわずかにも動かさずに答えた。やはり耳元に指先を添え、一瞬そちらへ意識を向ける。

その瞬間をジンは狙う。

「確かに、関係はない」

これで終わるのだから。

そう告げて、ジンは刀を……事象兵器『氷剣・ユキアネサ』を抜こうとする。

だがそれよりも先に、赤鬼あかおにが誰もいない方へ向けて軽く頷くのが見えた。

「ああ、問題ない。やっつけてくれ」

先ほどよりもずっと明瞭に聞き取れたその言葉は、明らかに誰かへ向けたものだ。

ジンは息を呑む。——通信だ。

柄を引き、刃に鞘を走らせる。だが赤鬼あかおにの方が先だった。一分の躊躇ためらいもなく拳を振り上げると、赤鬼あかおにはそれを自分の足元に叩きつける。

地面は碎けて弾け飛び、舞い上がった砂埃がスクリーンとなって一瞬赤鬼あかおにの姿を覆い隠した。吹き付ける砂塵を正面から浴びて、ジンは堪たまらず両腕で己かを庇かばう。

「待まちて、赤鬼あかおに！」

逃げるつもりだ。それだけはわかった。

だが砂埃を掻き分けてジンは鞘ごと刀を振り下ろした先には、すでに赤い肌の巨漢はいなかった。

大きな窓から、夕暮れの橙だいだいを纏まとった陽光が部屋の中に差し込む。

壁は白く、金で翼を広げたようなシンボルがいくつも描かれていた。床は深い青で、その上に金糸の刺繡しじゆうが施された赤い絨毯じゅうたんが敷かれている。

塵ちりひとつなく、清掃と整頓の行き届いた部屋だ。

その部屋の奥にどつしりと座する大きな机の前に、ジンⅡキサラギは立っていた。

ここは世界虚空情報統制機構ヤビコ支部の一室だ。

ヤビコ支部は、現在内戦中のイカルガ連邦領内にありながら統制機構支部としての機能を保っており、その安定性から内戦地の総合指令部となっている。

元々大きな支部ではあったが、統制機構の本部に比べれば規模は小さく、衛士えいしの数も少ない。だが士気も高く、なにより非常に統率の取れた支部であり、内戦中という混乱した状況下であるにもかかわらず実に理性的な運営がなされていた。

支部を預かるのはカグラⅡムツキ大佐だ。

イカルガ内戦において衛士全体をまとめる『統制機構衛士大隊総司令』であり、ジンと同じく十二宗

家の人間でもある。そして十二宗家筆頭ムツキ家の現当主でもあり……部屋奥の椅子に腰かけ、ジンの目の前で腕を組み洗面で呆れている男でもある。

「まったく……こっち来て早々に派手なことしてくれやがって」

やれやれと首を振り、盛大にため息をつく。

黒髪に深い紫色の瞳、精悍な顔立ちとどこか軽薄な雰囲気。それがカグラという男を一見したときの印象だ。

だがラフに着崩した衣服の下にはがっしりとした体躯が窺え、組んだ腕も見かけよりずっと引き締まった肉付きをしている。整った環境での鍛錬のみでは、ましてや見かけ通りの軽薄な生活では身につかない、実戦で出来上がった体だった。

そのカグラを、赤い飾り布が下がった大きな執務机を間に挟んで、ジンは不遜に思える平静さで見返した。

「騒ぎを起こすつもりはなかった。立ち寄った先で偶然赤鬼と遭遇したただけだ」

「それが問題だと言っているんです」

ジンの言葉に刺々しく返したのは、カグラではなく彼の傍らに立つ細身の青年だ。

大きく襟元を開いたカグラに対して、こちらは一番上の留め具まできっちり閉めた、見るからに真面目で堅物といった雰囲気だ。線の細い顔立ちによく似合うきめ細かい黒髪と、色味だけは穏やかなグ

レーブラックの瞳が、中性的な印象を作っている。

名前はヒビキコハク。少年じみた声色も手伝って外見で侮られることも多いが、この数年、私生活の乱れがちなカグラを側で支え、律し、叱咤してきた手腕は確実に周囲からの評価を集めていた。

そのヒビキが、細い眉をひそめ不快感も露わにジンへの忠告を続ける。

「キサラギ中尉。貴方の行いは軽率という他ありません。現在は内乱中で、貴方は戦地へ赴任してきているのです。ひとりの勝手な行いが思わぬ事態を引き起こし、そのせいで誰かが命を落とすかもしれない。そのことを重々ご理解いただきたい」

「……それくらいはわかっている」

「わかっていますせん！」

ジンの返答をヒビキの言葉がびしゃりと叩く。

いささかむっとしたようにジンがヒビキを見やる。その視線を横切って、カグラが椅子から立ち上がり机の前へと進み出た。

「あー……まあ、そうカツカするなヒビキ」

「ですが、カグラ様！」

「とりあえず、だ」

目尻を吊り上げ語調を強めるヒビキへひらりと簡単に手を振って、カグラはジンへと向き直る。直後、

一瞬だけ表情を消したカグラの拳がジンの頬を強打した。

鈍い音に容赦はない。

衝撃に頭を振らされたジンは、しばしそのままの角度で眉を寄せていた。唇の端が切れて赤いものが滲む。

わずかにヒビキが動揺を見せた。

部屋の中には数秒の間、緊迫の沈黙が降りる。

「……避けなかったのは、褒めてやる」

ぼやくようにそう言うと、カグラは緊迫感とはほど遠い歩みで席へと戻った。わざとどっかりと音をたてて深く腰を下ろし、改めてジンを見やる。

「テイガー——つまりあの赤鬼あかおにはな、もうずいぶんと前から軍部が追いかけてたんだよ。だが捕獲作戦中に『偶然』、お前が現れた。そのせいで作戦は台無しってわけ。わかったか？」

責めるというよりも言い聞かせるような語調でカグラは言う。

ジンは言葉を返さなかったが、代わりにわずかに眉根を寄せた。

あのとき自分を取り囲んでいたのだと思っていた無数の気配は、赤鬼あかおに捕縛のために編成された統制機とうせいき構こうの部隊だったらしい。そうとは知らずにふらふらと踏み入ったのは、確かにジンの過失だ。

ジンの表情にカグラは苦い笑みを浮かべる。目の前の金髪の新兵に、ここで謝罪や反省の言葉を求め

るつもりはなかった。そんなものに意味があるとは思っていないし、そんなものがなくともジンの自戒は伝わる。

「本来なら軍法会議ものだ。だが今回は特別にパンチ一発で勘弁してやるよ。本当に偶然だったみたいだしな」

ただ、と続けてカグラは笑みを消した。机の上に組んだ手を置き、身を乗り出す。意志の強そうな眉をはね上げ見上げる紫色の眼差しが、ジンの内心を覗き込もうとするかのように細められた。

「今回のこと……お前らしくないぞ。どうした？」

カグラとジンとの付き合いは短くない。軍人として同じ統制機構とうせいきこうに属する前から、十二宗家じゅうにそうけという繋がりつなで何度も顔を合わせていた。そのため互いに互いがどういう立場にあり、どういう人間であり、どんな目に晒さらされて来たのかをよく知っている。

ジンは一二宗家のひとつ、キサラギ家の実子ではない。ジンが幼いころに当主によって引き取られた子供だ。

元々キサラギ家は血筋に重きをおいておらず、より優秀な人材ほど重要な役目を与えられる。だがそれでもジンのように、養子でありながら次期当主へと推薦されているのは異例のことだ。期待の目や味方が多いように、彼を利用しようとする者も、当然敵も多い。

そんな危うい立場にいながら、士官学校卒業直後に規律を離れて独断行為など、彼のみならず彼の周

困の進退にも関わることだ。

それくらいのこと、ジンはよくわかっている。そしてカグラもまた、ジンをそれをよくわかっていることを、知っている。

「……特別、話すようなことはなにもない」

数秒の沈黙を挟んで、ジンはそれだけを答えとした。

なにかに呼ばれた気がする、などとは言えるはずもなかった。あまりにも信ぴょう性がないうえに、説明として成り立たない。

カグラはおそらく真面目に聞いてくれるだろうが、その真面目さに値するほどの説明ができないのだから、あえて言葉にする必要も感じない。

どこまでお見通しなのか、カグラは呆れたようなため息をつくとき、大きく椅子にもたれかかった。

「しかし、よくあの赤鬼あかおにをひとりだけで退けたな。作戦指揮とってた連中も驚いてた。今やお前の話でもちきりだよ」

「そんな話はいいい」

不機嫌そうにジンはカグラの話を遮った。たとえ赤鬼あかおにを退けようと、作戦を台無しにした事実に変わりはない。そのうえで評価されても複雑な気分だった。

「それより、その連中は？」

話を切り替えたい気持ちもあって、ジンはふいとカグラの後方へ目を向けた。

部屋に入ったときからずっと気にはなっていたのだ。部屋の奥、窓から差し込む光を避けた壁際に見慣れない姿がふたつある。どちらも白いケープとフードですっぽりと体全体を覆い隠し、さらには白い仮面で人相すら隠している。

ひとつ目玉の描き込まれたその仮面と、白い制服は、統制機構とうせいきこうに属する者の多くがその不吉なふたつ名と共に知っている。

第零師団『審判の羽根』。……統制機構内とうせいきこうで囁ささやかれているふたつ名は『ゴミ処理部隊』。

統制機構内部における裏切り者や危険人物などを調査し裁く、特殊な部隊だ。だがそれはあくまで表向きの話。実際は統制機構に反旗を翻す反乱分子を処理——すなわち暗殺する者たちだと囁かれている。ゆえに『ゴミ処理』部隊なのだ。

「ああ……見ての通りさ。本部からふたりも、恐いお守をつけられてんだよ。まったく、品行方正なこの俺のなにか気に入らないんだか」

その意味を知る衛士たいしならば誰でも眉を顰ひそめる白装束を振り返って、カグラはおどけた調子で肩をすくめてみせる。と、すかさず横のヒビキから鋭い言葉が飛ぶ。

「品行方正につきましては、すぐにも言葉の意味をお調べいただきたく存じます」

物腰こそ丁寧だが、自分の直属の上司に向ける言葉とは思えない。思わずぎよつとしてジンはヒビキ

を盗み見ると、少年のような顔立ちの副官はしれっと平静なままで手元の書類に目を落としていた。

カグラはまるで気にした様子もなく、人の良さそうな笑みをジンへ向ける。

「ま、とにかくだ。よく来たな。すぐ出発なんだろうが、それまではヤビコでゆっくりしていけよ。なんならいい店紹介するぜ？」

冗談めかした物言いに、ジンはつい笑みをこぼした。ヒビキやその後方に物言わず佇むたす第零師団だいぜろしだんの存在を思い出して、すぐさま引っ返めて首を横に振る。

「遠慮しておく。僕好みの店をカグラが知っているとはいえないからな。それに『品行方正』な店に入り出したのがバレたら、ツバキに叱られる」

「ツバキ……ヤヨイ家のご令嬢か！ あの子も士官学校だったよな。元気にしてるか？」

「さあ……。卒業してからは会っていない」

嬉しそうに弾んだカグラの問いに、ジンはまたも首を横に振ることになった。

ツバキじゅうにそうけヤヨイ。やはり十二宗家のひとつ、ヤヨイ家に生まれた少女の名前だ。ジンにとってもカグラにとっても、十年以上前から知っている馴染みの名前だった。

「そう、か。まあそうだよな」

カグラは苦く口元を歪めて頭を掻く。

遠のいてしまった幼き日の面影は、自分たちが重ねてきた年月の証あかしであるかのように思っていた。

気を取り直して、カグラが座り直す。

「うちの支部の案内は？」

「必要ない。宿舎の場所もわかる」

支部の中をあちこちうろつき回るつもりもない。ジンは今度は首を振らなかった。

「そうか。なら」

カグラが息をつく。話はここまでだ。

必要な手続きも終え、書類もすべて滞りなく揃っている。カグラが許したからこそ堅苦しい態度も捨てていたが、いつまでもここで私的な話に花を咲かせるわけにもいかない。仮にもジンの目の前にいるこの男は、統制機構とうせいきこうの総司令そうしやうなのだから。

せめて最後はと、ジンは形よく姿勢を整えた。

「失礼いたします。ムツキ大佐」

「おう。……ジン」

ひよいと手を上げて応じ、それからカグラはひどく真面目くさった顔でジンを見た。

真っ直ぐ向けられる紫の目は……なにか覚悟を決めたようでもあり、同時になにか苦悩するようでもあった。

「『簡単』に死ぬなよ」

縁起でもない餞別の言葉だった。

ジンは黙したまま踵を返すと、扉の前で一度頭を下げ、カグラの部屋から出ていった。

3

赤い絨毯が敷かれた長い廊下に人影はなく、静まり返っていた。

歩く己の足音を聞きながら、ジンはひたすら無表情に前だけを見つめていた。

明日からは戦場だ。それがわかっているけどもジンの気持ちは高揚にも不安にも震えない。

まるで風を知らぬまま凍り付いた湖面のようだった。ただ必要な事柄だけを淡々と頭の中で整理していく。

戦地の情報は事前に資料で受け取っていた。すでに幾度か目を通してはいるが、到着までにもう一度目を通しておくべきだろう。戦地となれば快適な生活が送れるはずもない。今夜のうちにしっかりと体を休め、厳しい環境に備えておく必要がある。

(特に用事も無い。さっさと宿舎に向かおう)

するべきことだけ整えて、早々に床に就くつもりだった。余計なことはなにもいらぬ。戦うために

戦地へ行くのだ。戦って、勝ち、あるいは負け。もしくは死ぬために。

規則正しく足を動かすジンの正面から、人がやってきていた。

人数は三人。全員、素性を覆い隠す特徴的な白い装束——『審判の羽根』だ。

カグラの執務室にいたふたりと同様に丈の長いケープで体を、目深なフードとひとつ目の仮面で顔を隠している。

ただし先頭のひとりだけは違った。

第零師団だいぜろしだん所属であることを示す白いケープこそ羽織ってはいるが、前は開かれその下に着込んだ衣服が露わになっている。仮面もなく、ふたつに束ねた長い髪と共に素顔が隠す気もなく晒さらされていた。

まだ若い女だ。ジンとさほど年齢も変わらないように見える。だがどうやら階級は向こうの方が上らしい。羽織ったケープのデザインと、なにより大きく制服を着崩しながら堂々と部下らしき二名を従えている様から推察できた。

すれ違う少し手前で、ジンは自ら廊下の端に寄った。足を止めて軽く敬礼の姿勢を取り、第零師団だいぜろしだんの女を先へ通す。

が、ジンの前を通過した直後、第零師団だいぜろしだんの女が足を止めた。

一拍遅れて後方の二名も立ち止まる。

目的はすぐに判明した。先頭を歩いていた女がジンを振り返ったからだ。

「……貴様がジン＝キサラギ中尉か？」

言葉と共に、値踏みするような視線がジンを捉える。

気分の良い目ではなかった。

振り向いた女はそれなりに整った容姿をしていたし、体の凹凸がよくわかる衣服からも窺えるように男をそそのめる魅力的な体形の持ち主でもあった。こちらへ向けた表情は唇で緩やかな弧を描いた微笑だ。だがその目がいけない。

柔らかな表情をしているというのに、彼女の目はまるでガラス玉でもはめ込んだように感情の揺らぎがなくひんやりとっていて、無機物めいている。

笑顔に相応しいどんな感情もそこにはないのだ。まるで人形に見つめられているような感覚を味わう。「話は聞いたぞ。あの赤鬼をひとりで退けたとか」

ガラス玉の目でジンを頭の前から爪先まで観察しながら、女が一步近づいてくる。

ジンは一瞬投げた視線を真正面へ引き戻したまま、口を閉ざしていた。無視だ。余計な口を利用して面倒事に発展するのが嫌だった。

だがその思惑はどこからか漏れていたらしい。女の後方に控えていた二名の第零師団が、仮面の下から不快感を露わにする。

「貴様、その態度はなんだ！」

声からして仮面の下は男らしい。掴みかかろうとするかのように一歩踏み出したその男を、仮面のない女が一瞥もくれずに手で制する。

女の視線がゆっくりと下がり、ジンの手元で興味鈍光を灯す。

そこにあつたのはジンの刀だ。

「それは事象兵器か？」

「……そうだ」

手に取るまでもなく一目ただけで言い当てられるとは思っていなかった。

事象兵器は存在こそ知られているが、実在し、実際にどんな形をしているかを知っている者は決して多くない。

その動揺がジンの口を軽くさせた。直後に、うかつに反応した自分に顔をしかめて口の中で舌打ちをする。

「おい、貴様。いい加減に……」

その舌打ちの音にまた仮面の男たちが身を乗り出す。

が、警告の言葉を遮って鈍い衝撃と破砕音が静かな廊下に低く響いた。

「なっ……」

「ラピスラズリ大佐……？」

仮面の男たちは、表情が見えずとも明らかかなほど狼狽ろうたえていた。その様を背景に『ラピスラズリ大佐』と呼ばれた女はにまりと笑む。

見ていたのはジン……の顔の真横にできた、明らかに人為的なへこみだ。まるで物凄い力で殴りつけられたかのように、壁材にヒビが入ってほこりと丸くへこんでいる。

そこにはつい一瞬前まで、ジンの頭があった。

素早く横に逸それたジンは無傷だ。それがどうやら彼女には愉快でたまらなかつたらしい。くつくつと喉を鳴らして笑う。

「さすがだな。噂なに違なわぬ男らしい。いい反応だ」

言いながら彼女は無造作に手を伸ばした。ジンがその動きに気付いたときにはもう遅く、女の指がジンの顎を捕まえた。

指を添えているだけにも見えるというのに、どういいうわけかその力は無遠慮に押し掴つかみにされるよりもなお強く、拒否を許さない。

なにをするつもりだ、と問う間もなかった。急に強い力で引き寄せられたかと思うと、女の舌先がくすぐるようにジンの口元をなぞって離れる。

すぐに気付いた。舐め取ったのはジンの血だ。さっきカゲラに殴られたときに口の端を切った傷が、不快感にじくりと痛んだ。

ジンの顎を掴んだままで、第零師団だいぜろしだんの女は妙に蠱惑こわく的に囁く。

「だがな、ここは軍隊だ。口の利き方と身の振り方には気を付けたほうがいい」

ただの忠告にしては不穏な声だ。同時にうっとり愉しむようでもある。

「ジンは今度こそ無視を心に誓う。姿勢は改めて作った敬礼に保ち、視線は真っ直ぐなにもない空間を見つめる。」

やがて女の手がジンの顎から離れた。改めてジンの姿を眺め、女はまた肩を揺らす。

「くくくっ……面白い男だ。私はメイファンⅡラピスラズリ。大佐だ。貴様あなたのような衛士えいしが戦いに加わるのは心強い。せいぜい『帝様』のために死力を尽くせよ」

そう言うのと、長い髪が音なく翻り、メイファンと名乗った女は歩き出す。向かう先はカグラの執務室だろう。

去りゆく白い背中を見てジンは微かな同情心あはれみを抱く。あんな連中の相手をせねばならないとは、支部の長なり総司令なりというのは厳しい任だ。

陽光の溶ける廊下へ吸い込まれていく三つの影を目の端で見送ると、ジンは己も早々に踵を返し、この場を後にした。

廊下を抜けてジンがたどり着いたのは、世界虚空情報統制機構せかいこくうじょうほうとうせいきこうヤビコ支部のエレベーターホールだ。高い天井に取り付けられた天窓から柔らかな陽光が差し込み、辺りは清廉とした美しさに満たされていた。

吹き抜けになった奥には、書物を開き下界へ慈しみの視線を向ける白い女神の彫像が佇む。磨かれた青白い床は日々大勢の人間が往来しているというのに鏡のようで、陽光を受けてほのかに光を纏っているかのようにも見えた。

円形のホールの奥にはやはり女神を模した像が立ち並んでいる。女神は秩序の象徴だ。正しき力によって正しく統制された世界。それが世界虚空情報統制機構せかいこくうじょうほうとうせいきこうの理念であり、ジンを始めとする多くの衛士えいしが士官学校で教え込まれる指針でもある。

小さな女神像の間に設置された二機のエレベーターがジンの帰路だった。

脇目もふらず真つ直ぐ足を向けるジンに、それまで吹き抜けを眺めていた小柄な人影がふらりと歩み寄る。

「ジン…キサラギ中尉、ですよね？」

ついさっきも聞いたような言葉だった。

だが今度声をかけてきたのは女ではなく、男だ。ジンよりもいくらか年下だろう。少年と呼んでも差

し支えあるまい。

士官学校生といったほうがしっくりくる印象があるが、身に着けているのはジンと同じ青い制服だった。頭にはやはり制服である青いベレー帽をかぶっており、その下から覗き込むようにしてジンを見上げてくる。

ジンの知らない人物だ。わずかに眉を寄せて、ジンは少年を一瞥する。

「ああ、そうだ。……君は誰だ？」

「よかつたあゝ。ここで待っていたら来ると言われていたのに、中々いらっしやらないから、行き違いになってしまったのかとひやひやしていたんですよ」

大きく息を吐き出して、彼は^{おおげさ}大袈裟に胸を撫で下ろす。それから慌てて背筋を伸ばして、びしりと敬礼の姿勢を取った。

「はじめまして、中尉。私は^{わたくし}私は……」

「っ……待て、なに？　なんと言った？」

突然、ノイズでも混じったように少年の言葉が聞き取れなくなった。耳鳴りを抑えるように耳元へ手をやって、ジンは顔をしかめながら尋ねる。

少年は一拍きよんとしてから、さらに背筋を伸ばして答えた。

「はい。私はホノカ伍長であります。キサラギ中尉の戦地でのお世話をさせていただきます。どうぞ以

後、お見知りおきください！」

緊張を滲ませながらも、ホノカは口元に笑みを浮かべ若々しく清々しい声色でそう言った。

「あ、ああ……そうか」

対してジンは浮かない声でそれだけ返す。自然と眉間に皺しわが寄った。

ホノカと名乗った少年兵は、ジンの育った家、キサラギ家が用意したいわば付き人だ。

事前に繰り返しいらないと断ったのだが、その申し出はどうかやら聞き入れてはもらえなかったようだ。

そもそもキサラギ家を含む『十二宗家』——統制機構ちゆうせいきこうにおいて特別な権力を持つ貴族的な家の人間が

士官として任に就く際、付き人を用意するのは恒例のことだった。

ジンにとってキサラギ家は、幼いころに行くあてのなかった自分を引き取り、今日にいたるまであらゆる面倒を見てくれた恩義ある家だ。次期当主などと持ち上げられてはいても、その家の取り決めに邪険に扱うなどできるはずもない。

「あのう……中尉？ もしや、お具合でも悪いのですか？」

黙り込んで難しい顔をしていたジンを、ホノカがこわごわ覗き込んでくる。

ジンははっと息を吞んで顔を上げ、軽く頭かぶりを振った。付き人だの十二宗家じゅうたそうけだの、家柄だの育ちだの、これから戦地へ向かう身にはどうだっていいことだった。

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

つい口調が突き放すようになってしまったが、構わずジンはエレベーターへと歩き出した。

すかさずホノカが後を追いつ、ジンの脇から腕を伸ばしてエレベーターのスイッチを押す。

すぐに音もなく、滑り込むようにエレベーターがやってくる。ジンが乗り込むと、それを待ってから中へ駆け込み、ホノカがボタンを操作した。

その様をジンは横目に見る。ちよこまかと付き従う姿は子犬を彷彿とさせた。

おそらくこの少年は、ジンと十二宗家じゅうしゅうけとの関係も、これから向かう戦地がどんな場所なのかもろくに知らないのだろう。そう思うといくらか憐れあわでもある。

(……といっても、僕も戦地のことなどにも知らないか)

下がっていくエレベーターの階数表示を眺めながらジンは胸中でぼつりと思う。

これまでジンが過ごしてきたのは、嚴重に警備された十二宗家じゅうしゅうけの家と、統制機構とうせいきこう直々に管理され、守られてきた士官学校くらいだ。

特権階級の家で育つたために命を狙われるような状況には慣れてるが、実際の戦地に赴くのはこれが初めてだった。

明日、おそらくジンの世界はすっかり景色を変えるだろう。

だがやはりそれもジンの心を大きく揺るがせはしない。居場所が変わる。それだけのことだ。それだけのことでしかなかった。

約百年前、人類は滅亡の危機に瀕^{ひん}していた。

『黒き獣』と呼ばれた巨大な化け物が、生き物なのかどうかすらわからない『それ』が出現し、都市を、国を、土地を、人を、あらゆる生命を破壊して回ったのだ。

人類は多くの犠牲を払いながらも、動き回る災厄『黒き獣』と戦い、やがて六人の英雄によって化け物は倒される。

だが倒れた化け物は世界に悪しき土産^{みやげ}を残していった。魔素^{まそ}だ。

『黒き獣』の出現と共に地上に噴出した黒い霧状の物質——『魔素』は『黒き獣』の消滅と共に大量に世界中へ広がり、今となっては空气中に当たり前に含まれるものとなってしまった。

魔素^{まそ}は生物に著しく影響を与える。体を蝕^{むしば}み、正常な理性を失わせる。魔素^{まそ}に長く触れていた野生の動物は凶暴化し、異形化し、魔物と呼ばれる存在へと成り果てた。

だから人類は『階層都市』^{かいそうとし}を造った。魔素^{まそ}の溜まる地表から離れて暮らすために、山岳部のような高度のある場所にさらに高く、何層もの階層を積み上げて『階層都市』^{かいそうとし}と呼ばれる都市を築いたのだ。

だが魔素^{まそ}はなにも悪いことばかりではない。それらは無尽蔵に空气中に充滿するエネルギーの塵でも

あつた。

魔素は様々な技術や動力に用いられるようになった。

今ジンが乗っている空飛ぶ船『魔操船』もまた、取り込んだ空気中の魔素を推進力に変えて航行していた。

「うわあ……いよいよそれらしい景色になってきましたね」

鈍い金色の枠に囲まれた窓から外の景色を眺めて、ホノカが緊張感のない声で呟く。

向かい合った座席の正面に腰かけ、それまで赴任先の資料を読み込んでいたジンは、少年の呑気な声に久し振りに視線を持ち上げた。

流れゆく窓の景色は階層都市ヤビコを離れ、長く荒野を渡っていたが、いつの間にか緑深い森の上を通過していた。

敵の目に留まらぬよう低空で航行しているために、背の高い木々の先が今にも船底を擦りそうだ。そのまま墜落でもしそうな高度は、いささかの不安を掻き立てる。

「それにしても、キサラギ家の方がこんなところに着任だなんて、普通なら考えられないことですよ。偉い人たちはどうしてそんなことをお決めになったんでしょうね」

首を伸ばして下方の森を覗くようにしながら、ホノカはジンへ言葉だけを向ける。

「さあな」

ジンはそれだけ答えると、視線をまた資料へと戻した。

それに気付いて、ホノカが乗り出していた体を引つ込め、座席の中にきちんと収まる。

「余計なことかもしれませんが……キサラギ中尉はそれでよかったですか？」

やっと大人しくなるかと思ったが、まだ釈然としていないらしい。答えるまで繰り返されそうだったから、ジンは軽くため息をついて顔を上げた。

「僕は統制機構の衛士だ。命令ならば従う。それだけだ」

「では、不満はないんですか？」

「ないな」

そもそも自分は政府であり軍でもある世界虚空情報統制機構に属するために、士官学校へ入学したのだ。軍人として戦地に配属されることに不満などあつては、本末転倒だ。

とはいえホノカ相手にそこまで語ってきかせる義理もない。ジンは短い言葉できっぱりと会話を打ち切ると、また資料の黙読に戻る。

が、期待した静寂は訪れなかった。

「あ！」

不意にホノカが声を上げたのだ。何事かと思つて、いい加減少々煩わしく思いながらもジンはまたも視線を上げる。

ホノカはまた窓の外に夢中なようだった。ただし着目しているのは船の下の森ではない。

「見てください、中尉。もうすぐ着きますよ」

ホノカがやはり緊張感なく、いっそ楽しんで見つめる窓の外の景色が、数秒揺らぐ。虹色の光が魔操船全体を舐めるようにして通つていった。まるでシャボン玉の中に入り込んだみたいな光景だ。

虹色の光を通過すると、景色が変わる。

そこは隙間なく木々の生い茂ったうっそうとした森であったはずだが、今はその中にぽっかりと切り拓かれた場所ができていた。ほんの少し前には、目に見えなかったというのに。

「迷彩の術式か……」

実際にはそこにあるものを『ない』と認識させる術式だ。

術式とは、事象兵器同様に『黒き獣』が暴れ回っていた時代に開発された技術のことをいう。人それぞれに適性の差はあれど、魔道書を用いることで誰でも様々な現象を引き起こすことができるのだ。火をつけたり風をコントロールしたり、水を生み出したり土で形を作ったり。一種の疑似的な魔法として、主に統制機構内で広く扱われている。

その根源はやはり魔素だ。この辺りは都市から離れていて魔素も濃い。魔素に狂わされた魔物も多く闊歩していると聞く。

こういう土地ならば、大がかりな迷彩の術式を維持するのも難しくはないだろう。

「目に見えているものが実際の姿とは限らない、ということですね」

頭に載せたベレー帽をちよいと引つ張って直しながら、ホノカがほんのりと楽しそうに呟く。

ジンは横目に一瞥をくれただけで、特になにも返さなかった。

すぐに制服姿の衛士えいしがやってきて、まもなく着陸すると告げていく。

魔操船まそうせんの高度がぐっと下がったのがわかった。そのまま吸い寄せられるように森の中へと船は着陸し、ジンとホノカは低空の長旅から解放された。

取り付けられた短いステップから降りると、そこは上空から見ているよりもずっと乱雑な場所だった。

森、というよりジャングルに近いような混雑した木々の密集地帯に囲まれて、土肌が剥き出しになった空間ができていた。突き出した岩やまばらに生えた雑草の中で、整然さの欠片もなくいくつものテントが建てられている。

テント自体は統制機構とうせいきこうの支給品だが、あちこちから集めてきたものなのだろう、大小や古さも、汚れの度合いもまちまちだった。

そしてそのテントの周囲で、統制機構とうせいきこうの制服を着ていたり、あるいは着ていなかったりする見るからに無骨な男や女が武器や資材を手に行き交っている。

長く都市の、それも管理が行き届いた環境で育ってきたジンにとっては、異様な光景だった。もちろん資料や本、あるいはニュースなどでこういう現場が存在することは知っていた。だが間接的に知るこ

とと、実際に自分の目で見るのがどれほど違うのかを思い知らされる。

空気が違う。熱が違う。

湿っていて、熱をため込んだような気候はなにもかまが体に纏わりつくようで不快だった。濃すぎる木々や草の臭いが神経にまで滲み込みそうだ。

ここにあるなにもかもが、温度や臭いといった五感を刺激するものを含みすぎている、かえって自分がここに立っているという現実味が薄らぐ。

魔操船まそうせんはジンとホノカ、それに積んでいたいくつかの物資を降ろすと、すぐに飛び立っていった。長く滞在して目立つわけにはいかない。

自分たちが乗って来た乗り物が無情にも遠ざかっていくのを、ホノカは荷物を胸に抱えたまま呆然と見送っていた。まるで置き去りにされたかのような姿だ。

これが同年代の兵士ならジンもあからさまに呆れられたのだが、相手は年下の少年兵だ。彼には心細い光景なのだろうと、わずかながらの同情も湧いた。

「行くぞ」

一応声をかけてやってから、ジンは自分の荷物をぶら下げ歩き出す。向かうはこの基地の最奥にある、指揮所のテントだ。

びくりと跳び上がって、ホノカは慌てて追いかけてきた。ジンの陰に隠れようとするかのように、す

ぐ後ろをちよこちよこことついてくる。

「……なんか、すごく見られてませんか？」

鞆をぎゅつと両手で抱えて歩きながら、ホノカはきよるきよると周りを見回した。

ジンは歩調を乱さず、前を見据えたまままで短く答える。

「当然だろう」

ジンが配属されることは、基地内にもすでに知らせが届いているはずだ。

あの十二宗家じゅうにそうけキサラギ家の男子が、統制機構とうせいきこう本部から送り込まれてくるのだ。それもつい先日士官学校を卒業したばかりだというのに、中尉という階級を引っ提げて。

乱雑なテントの間を抜けて奥へと進むジンとホノカには、先ほどからずっと無遠慮な視線が注がれていた。不審、訝いぶかしみ、好奇。どれも愉快とは言い難い視線ばかりだ。

ジンにとっては慣れた視線だ。幼いころからこういった類の目を向けられてきた。

だがホノカはそうではないだろう。気遣うべきかと思つたが、小さな動作で肩越しに見やつた彼は意外と平気そうな顔をしていた。

「ここが……前線なんですよ。しかも前線中の前線、最前線。そのうえ現在唯一、統制機構とうせいきこう側が劣勢とされてるところで。最悪の激戦区、なんて言われているんですよ」

周囲を気にして首を引っ込めているくせに、周囲を気にして声を潜めることはせずに、ホノカは調子

を取り戻して口を開く。劣勢、の言葉に注がれていた視線のいくつかが攻撃的な色になったことにホノカは気付いていないようだ。

「聞いている」

どうやら心配してやる必要はないらしい。思いの外図太い神経に内心で感心しながら、ジンは歩みを進める。

その背中をホノカの声が追いかけてくる。

「ここも一応イカルガ連邦の領内ですから、気候や土地への馴染みも向こうのほうがありますし、地利といった面からもイカルガ側が有利なんだそうです。そのうえここは密林の中で視界も悪いから、さつきみたいな小型の魔操船まそうせんが着陸するのがやっとで物資も行き渡らない。そりゃあ、いかに訓練された統制機構とうせいきこうの兵士といえども苦戦を強いられますよね」

「……よく勉強してきたようだな」

「ええ、はい。資料は何度も読みましたから」

半分くらいは嫌味のつもりだったのだが、ホノカは褒め言葉として受け取ったようで弾んだ声が返ってくる。

ジンは気取られぬようにそっと額を押さえた。軽い眩暈めまいを覚えるのはなにも旅の疲れからではない。だが確かに彼が言うように、資料はしっかりと読み込んできたらしい。ホノカの言ったことは、ジン

もまた何度も確認したようにこの基地の実情そのものだ。

密林の中の苦しい戦いをいつまでも強いられている、最悪の激戦区。

統制機構とうせいきこうの兵士はもちろんだが、腕に覚えのある傭兵も多く投入されている。基地内に統制機構とうせいきこうの兵士には少ない、獣のような姿をした獣人や獣人の特徴と人の特徴を併せ持った亜人種が多くみられるのも、そのためだ。

「厳しい場所ですけど、ここは重要な拠点なんです。だから簡単には手放すわけにはいかないですよ」

大変ですよねえ、などとホノカはどこか他人事のように言う。

自分たちも今日からその拠点を守るひとりになるのだが、その実感はまだなさそうだった。

ただそんなことよりも、ジンは彼の口にした別の言葉に気を取られた。

(重要……ここが?)

自然と眉が寄る。

確かに資料からも、ここが重要な場所であるらしいことは重々窺えた。だがなぜここが重要なのか、それがわからない。

イカルガ連邦内に深く踏み込んだ立地ではあるが、近くに都市があるわけでも戦争に関わるような施設があるわけでもない。仮にこの森をイカルガ連邦が押さえたとしても、統制機構側とうせいきこうの脅威になること

はない。

攻めるにしても守るにしても、戦略的に重視すべき場所をもっと他にあるはずだ。

なんとなく釈然としない。ずっと抱えていた不満にも似たもやつきを喉の奥に飲み込むジンの後ろでは、ホノカがなおも話し続ける。

「イカルガの兵士って、どんな感じなんでしょう……。実際に見たことはなくて。噂ではとんでもなく強いらしいじゃないですか。やっぱり恐いですよね」

ね、と後方からジンを窺う。

思わずジンはため息をついた。

丸一日かかった魔操船まそうせんでの道中でも感じていたことだが、ホノカは大人しそうな雰囲気には合わずよくしゃべる少年だった。

初めは緊張や不安ゆえに口数が多くなっているのかとも思ったが、元々の性格なのではないかここ数時間でジンは考えを改めていた。

人と話すことが特別嫌いなわけではない。だが騒がしいのはあまり好きではない。

この少年とこれからしばらく、この土地で生活を共にするのかと思うと、当初とは違う不安が胸中のしかかる。

「……恐かるうが、そうでなかるうが関係ない。敵を倒すが、ここでの僕の任務だ」

「それはそうなんですけど……」

ジンのため息の意味に気付くこともなく、ホノカは困ったようにそう言った。

そこからまたなにか語りが始まるかとも思ったが、ちょうどよく饒舌な少年の口を閉じさせる口実ができた。指揮所である一際大きなテントに到着したのだ。

ジンが足を止めると、遅れてホノカも立ち止まり口をつぐむ。

ジンがテントの入り口に立つ衛士へ配属を知らせる書類を渡すと、ひとりが機敏な動きで中へと入っていった。しばし待たされ、やがて入るようになると野太い男の声がかかる。

テント内の空気はむっと生ぬるく、人の汗の臭いが染みついていていた。

気温や気候を完璧にコントロールしている階層都市では味わうことのない、生々しい空気だ。臭くて、不衛生で。

そんな空気の中、周辺の地図を大きく広げた机の向こうに、この基地の長が簡素な椅子にどっかりと腰を下ろしていた。

ごつい体つきの、四十代ぐらいの男だった。盛り上がった全身の筋肉はそれなりに訓練で鍛えたものだろうが、その上に同じくらい分厚い脂肪も蓄えている。黒い口髭の下では肉厚な唇がにやりと嫌味っぽく歪められていた。

周囲へ配る高圧的な視線と椅子の上でふんぞり返っている尊大な物腰から、彼がこの基地の指揮官で

あること、そして彼がこの基地内でどんな振る舞いをしているかが見て取れた。

「本日よりこちらの配属となりました、ジンⅡキサラギ中尉です」

指揮官の高圧的な視線を受けながら、ジンは背筋を伸ばし、士官学校で繰り返し叩き込まれた着任の挨拶を口にする。慌てたようにホノカが続いた。

「同じく、ホノカ伍長です。キサラギ中尉の付き人として参りました」

「ほう。『付き人』か」

とたんに指揮官が太い眉をはね上げた。机の上で太い指を組む。

「キサラギ中尉は士官学校を出たばかりの新兵と聞いていたが、付き人同伴とは……さすがは十二宗家、キサラギ家のご子息だ」

明らかに皮肉だった。

ホノカがなにかマズイことを言ってしまっただろうかとジンを横目に窺う。

わざとらしい。ジンは内心で冷めたため息をつく。初めて聞いたかのような口ぶりだが、ジンが付き人を連れてくることは事前に通達されていたはずだ。

だがここでの反論がいかにも愚かしいことか、考えるまでもない。ジンは沈黙を選ぶ。

微動だにしないジンを値踏みするかのようになり、指揮官の視線が全身を何度も往復する。

「階級は中尉だそうだな。十二宗家の人間は士官学校を出ると同時に中尉の階級を与えられると聞いて

いたが、本当だったとは。大層な階級に付き人までつけてもらって、配属先がここは貴様も大したものじゃないか。さぞかし『期待』されていることだろう……この死傷者がずば抜けて多い戦場に『わざわざ』送られたんだからな」

所々言葉をおおげさに強調させて、指揮官は舌の滑りの調子もよく語る。語りながら、ジンがさつき衛士に渡した資料を興味もなさそうに適当にめくっては眺め、机の上に放り捨てた。

「お前の配属先は第九分隊だ。テントに番号が振ってあるから自分で探せ」

底意地悪そうにそう告げると、もう行けとばかりにしつしと手を振った。

歓迎されていないことは明白だ。指揮官だけにではない。指揮官の側に立つ衛士たちもまた、気に入らないものを見る色でジンをほうをチラチラと見てくる。

なるほど、ずいぶんと居心地のいい基地のようだ。

「……失礼いたします」

冷やかなほど平淡な声でそう口にする、ジンは無駄のない動きで踵を返した。そのまま真っ直ぐテントから出ようと……したところで、背後から声がかけられる。

「——『地獄』へようこそ」

指揮官の足を這うような不気味な言い様に、ぞつと首筋の産毛が逆立つ。だが一瞬足が止まったもののジンは振り返らず、足早に外へ出た。

外に出れば、今度は密林から押し寄せてくるような植物と土の臭いに気圧けおされる。じんわりと背が汗ばむような熱気は不快感しか搔き立てず、そろそろ夕方と呼ぶ時間だというのに地上を焼く太陽はまだずいぶんと高い位置で忌々しい存在を主張していた。

自然と眉間を寄せながら、ジンは決して広いとはいえない野営地を進む。

ひしめき合うように建てられたテント群の外れ、野営地と密林の間のような場所に『九』の数字が大きく書かれたカーキ色のテントがあった。

あれが配属先の第九分隊用テントらしい。

わざわざ案内を買って出てくれる者もなく、未だに注がれる奇異の視線の中をかいくぐって、ジンはその目的のテントへと入る。

入って、その途端にジンは思わず顔をしかめる。

まず真っ先に感じたのは、やはり臭いだった。むせかえるような土と汗と血の臭い。

指揮所の臭いも相当にきついものがあったが、ここに比べればずっとましだった。そしてそれだけで、このこと指揮所の役割の違いを痛感する。

「う……」

小さなうめき声が聞こえてジンが目をやると、ホノカが口と鼻を押さえていた。心なしか顔が青ざめているようにも見える。だがテントから飛び出して逃げなかったのは、意外だった。

代わりに小柄な少年兵は手の平の下でくぐもった不平を漏らす。

「ここで……寝泊まりするんです、よね？」

「そうなるな」

「ほ、本気ですか？」

「本気もなにも他に選択肢はない。それともジャングルの中で寝たいか？」

「い、いいえ！」

慌ててホノカはぶんぶんと首を振る。

その様にジンはため息をひとつ送った。

テントの中は無駄なものがないせいか、思っていたよりも広く思えた。ふたつのテントを中で繋げてあるようで、手前の部屋には折り畳み式のテーブルや椅子が、奥の部屋には寝袋や簡素な骨組みで作られた二段ベッドなどが置かれている。

兵士は四名、中にいた。

全員統制機構とうせいきこうの制服を各々に着崩して着用しているが、雰囲気からしてこの戦争のために雇われた傭

兵だろことが窺えた。少なくとも士官学校に初等部から通っていたということはないだろう。

ひとりは女だ。彼女ともうひとり褐色の肌で、ひとりは白い肌。もうひとりが黄色人種。

性別も肌の色もまちまちな彼らは、訝しみの視線でジンとホノカを睨みつけていた。

もの言いたげな顔だ。だがあえてこちらから声をかける必要性を感じず、ジンはふいと目を逸らすと奥の部屋へと足を向けた。

二段ベッドの近くに棚が設けられていて、そこにそれぞれの私物らしき鞆が押し込まれているの見える。その空きスペースに荷物を置かせてもらうつもりだった。

だがその前に、素早く人影が立ちはだかる。

「待て」

鋭い声でジンの行く手を塞いだのは、褐色肌の唯一の女衛士だ。

引き締まった細身の体はジンよりも大分小さく、平均に比べれば小柄な部類に入るだろう。身軽さを重視して着込んでいる統制機構とうせいきこうの制服は、肩と腹が大胆に露出するデザインとなっており、その色濃く野性的な肌色が惜しげもなく晒されている。

黒髪は癖の強いドレッドヘアだ。独特な形に高くまとめており、ぐつと髪を引き上げているせいで元々の吊り目がさらに眼光きつく目尻を持ち上げられている。

意志の強そうなたい眉の下で、神秘的なインディゴブルーの瞳が曇りなくジンの姿を映す。

「誰が勝手に入っていると言った」

射貫くような眼光を向ける彼女の瞳はまるで猫のように大きい。その目をジンは淡々とした表情で見返す。

「僕はここに配属された。このテントを使う権利がある」

「配属だと？ 一人前の軍人のような顔をするな、十二宗家の七光りのくせに」

冷静極まりないジンの物言いに、女はふんと鼻を鳴らした。

ジンはわずかに眉を持ち上げる。この一言だけで、彼女がなにに不満を抱いているのかがよく理解できるのだから『十二宗家』という言葉は便利だ。

女はなおも眼光を尖らせてジンを睨む。

「お坊ちやま暮らしの新兵などに用はない。痛い思いをしてお綺麗な顔に傷を作る前に、さつさとパパとママのところへ帰れ」

言い捨てて女は桃色の唇を皮肉っぽく吊り上げてみせた。

彼女の背後で他の兵士が辟易したような、嘲笑するような息をつく。嘲笑を向けられているのはジんだ。彼らの視線と態度でわかる。

だがこの程度の嫌味や皮肉など、これまでキサラギ家で聞いてきたものに比べれば可愛らしいものだ。今更ジンの胸に響きもしない。

「配属を決めるのは貴様ではないだろう。それとも貴様がここの隊長だとも？ だったら正式に除隊命令を下してもらわなければ勝手に帰還することはできない。その権限があるなら自由に使うといい」
緑色の瞳も冷やかに、ジンは淀みなく言葉突き返す。

かつ、と女の頬に朱が走った。仲間の前で、顔色ひとつ変えずに蔑まれたことへの怒りゆえだろう。ぼつりとした唇をわななかせて、なにか言い返してやろうと言葉を探す。

だがそこへ、別の声が割って入ってきた。

「いや、隊長は俺だ」

声と同時に、ジンの背後からぬつと濃い影が覆いかぶさる。ジンの影をすっほり飲み込んでしまうほどの大きな影だった。その大きさにいささか驚いて、ジンは背後を振り返る。

豊かな口髭を生やした大男が、テントの入り口に立っていた。

それはもう見事な体躯の男だった。

がっしりとした体はまるで筋肉の鎧よろいを纏まとっているかのようで、幅広い肩はジンと褐色肌の女が並んでもまだ大男のほうが広い。分厚い胸と腹は陰にジンがすっかり隠られるほどであるし、その屈強な巨体を支える脚はジンの胴体ほどもある。

先日荒野で遭遇した赤鬼あかおにほど人間離れた肉体ではないものの、人間の骨格にはこれ以上筋肉などつかないのではないかと思うほどみっしりと鍛えられた肉で覆われた男だ。

その鋼の肉体の上に乗った頭もまたいかつい四角顔で、短く刈り込まれたアッシュグレイの髪と、口の周りを囲む髭がさらにごつい印象を与える。

けれど明るい緑色の瞳と浮かべた表情は、柔らかく人好きのしそうな穏やかなものだった。

「お、大きい人ですね……」

ほそりと素直すぎる眩きを漏らしたホノカに、大男は豪快に嘖き出して分厚い胸を上下させた。それから気のいい笑顔のまま、ジンに向けて手を差し出す。

「第九分隊の隊長、グリムウッドⅡハスター大尉だ。彼女は俺の部下でカレンジーナⅡパルセット伍長。よろしく頼む」

「ジンⅡキサラギ中尉です。本日付けで配属となりました。よろしくお願いいたします」
堅く語調を整えてジンは返す。

差し出された手に一瞬迷ったが、まずは敬礼を取ってからできるだけ控えめにグリムウッド大尉の手を握った。

途端に、捕獲でもするかのような強さで手を握り返された。

ジンは思わずびくっと肩を跳ねさせる。

グリムウッドは朗らかで豪気な笑顔のままだ。しっかりと握手を交わすと、その手でバンと強く一回ジンの背を叩く。

「しかし、まさかキサラギ家の人間がこんなところに配属されるとは。よほど好かれてるみたいだな。なにかしでかしたのか？」

冗談めかして言って豪快に笑う。

降ってくるような笑い声を見上げるジンは表情を動かさず、黙ったままでいた。だがあえてそうしたというよりは、反応に迷ったというほうが正しい。

グリムウツドの言葉はからかいこそ含んではいたが、気さくな『親しみ』があった。この基地に来て初めてのことだ。

嫌味や皮肉には慣れている。だがこういうのは、あまり得意ではない。遠慮なく大きく踏み込んでくるようなやり方は、学生時代に数度あったくらいだ。

思わずジンはカレンジーナたちを見る。褐色肌の女は洪面で腕を組み、他の衛士^{えいし}たちはやれやれといった様子で顔を見合わせ肩をすくめていた。

彼らに動揺はない。グリムウツドという男は普段からこういう人間なのだろう。士官学校を卒業したばかりの生意気な新兵にも、笑顔で手を差し出すことができるような。

グリムウツドはもちろんホノカとも力強い握手を交わすと、後ろで苦笑していた三人の衛士^{えいし}も紹介してくれた。

第九分隊はグリムウツドを隊長に、彼ら三人とカレンジーナ、そして今日から配属となったジンとホ

ノカの七人編成らしい。

「食事も身支度も就寝も、すべてこのテントだ。見てわかると思うが奥の部屋が寝室になってる。荷物はそこにまとめておけ。それから……」

続いてテントの中を案内しようとグリムウッドが奥へ歩き出す。だが彼の言葉は終わる前に遮られた。突然けたたましく鳴り響いたサイレンに。

誰かが息を呑む声が聞こえ、弾かれたようにカレンジーナが顔を上げたのが見えた。グリムウッドがぼやくような呻き声を漏らして頭を掻くと、瞬きをひとつ挟んで表情を変えた。

その瞬間、場に針のようなものが通る。

緊迫の糸とはまた違う、もつと鋭く強張ったもの。緩んでいたものを瞬時に締め上げるような集中と気迫だ。

「第九分隊、準備しろ！ 仕事だ！」

太く張りのある声をさらに張ってグリムウッドが吼えるように告げる。

「了解！」

申し合わせたかのように声を揃えて応えると、カレンジーナをはじめとする第九分隊の面々は各々の武器を取ってテントから飛び出した。

ジンも私物の荷物を放り捨ててて続く。

少なからず影響を受けたのだろう。体の中を電撃のようなものが走っていく。なにが起こっているのかは問わずともさすがにわかった。

機械的に同じ音を繰り返すサイレンは、敵の接近と緊急出撃の知らせだった。